

第1学年 国語科の実践

- 1 単元名 こえに出してよもう 『はじめは 「や!」』 こうやま よしこ
- 2 単元目標

○ 登場人物の言動から、様子を想像しながら読み、音読することができる。

- 3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題…子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手 立 て…子どもの思いや願いを見とった単元構想と授業づくり
ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」
・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

【聴く・話すについての指導】

話したくなる、聞きたくなる雰囲気、その土台作りを大切にしている。常にともだちを意識できるよう、そして肯定的な言葉で話すこと、それをじっくり待てるよう指導してきている。

聞くことに関しては、・話す人の顔を見る・最後まで聞く・声が聞こえたら話をやめる

話すことに関しては、・はっきりと・気持ちを込めて・詳しく

この3つを合い言葉にし、児童にも浸透してきている。

調べてきたり参考になるものを持ってきたりすることは、話したくなる、聞きたくなることにつながると考え、賞賛している。また、自分のことを自由に表現できるよう、朝の会のように「聞いてほしいこと」の時間を十分にとっている。自由な雰囲気の中で語るように話したり、共感してもらえたり、認めってもらえたりすることは、話すことへの自信にもつながっている。しかし、聞いているようで聞いていない児童もいる。集中して聞くことができるようにするには、話し手も分かりやすく話す、まとめて話すことが大切と考えて指導している。

【関わり合い・ひびき合い】

算数の「3つのかずのけいさん」で計算の方法を考えたときだった。「まん中をとばして、計算する。」という考えが出た。「なぜ、とばすの。左から順にするんだよ。」「答えは、同じだよ。」「ほかの計算の仕方だってあるってことだよ。」また、生活科で朝顔の伸びてきたつるをどうしていくのかを、話し合ったときには「おかあさんが伸びたつるは、いつも切っているよ。」という考えがでたときには「支柱を立てれば巻き付くよ。」「だって、ぼうぼうになるよ。」考え方や方法はいろいろあるのだということに、子どもたちが気づかされたときだった。このことをきっかけに 物のとらえ方や取り組み方に、変化がみられるようになってきている。「本に書いてあった。」ではなく、だからどうしていくのか、でもこれもある、というさまざまな角度から考えを持つ楽しさを味わってほしいと考えている。

- 4 単元と指導について

<単元について>

「おおきなかぶ」の学習では、繰り返しのリズムを楽しんで読んできている。おじいさんやほかの登場人物の様子をもとに、会話を想像し、それを音読に生かして、音読発表会で表現する楽しさも味わっている。

『はじめは「や!」』のお話の特徴も、繰り返しのおもしろさである。文のリズムも読みやすい。くまときつねが何度も出会う場面では、会話文と初めてでくる内心語にも興味をもつと考える。また、挿絵もあって、二人の様子がわかりやすい。挿絵と本文を対比しながら、二人の様子や気持ちに関心を持って読み進めていくことができる。「……」は、台詞がない。どう音読するのか、どんな気持ちなのか。想像を膨らませながら取り組んでいくと考えられる。本教材でも音読発表会の場で表現したいと意見がでると考えられる。発表会にむけて、気持ちを込めて音読するためにどう読んでいけばよいのか、楽しみながら取り組んでいけると考えた。

<指導について>

子どもたちは、「おおきなかぶ」の音読発表会を経験し、音読することや発表することに自信を持っている。この教材は、二人の距離感が少しずつ変化していく。その気持ちの変化を想像し読み取ることで、音読の広がりにつながっていけることを期待している。

本時では、「二人が友達だなという気持ちに変わったところは、どこだろう。」について話しあっていく。「・・・や。」と、話をしたときからだと考える子もいるだろう。本文に「ともだちになった」と書いてあるから、そこだと考える子もいるだろう。ネームプレートを使って、自分の考えをはっきりさせ、比較することで友達の考えに関心をもたせたい。話し合いがたてこんでくると、まだわかりにくい子もいるので、こだわって考えるところに気をつけていきたい。そして、どうしてそう思ったのか、本文にたち戻って考えたり、挿絵や今までに想像したことを振り返ったりしながら、話し合えるようにしたい。そして、自分の考える気持ちの変わったと思うところと、友達の考えとを比べながら、自分の思いを持って話したり聞いたり受け入れたりする姿をひびき合いの姿としたい。

話すことに自信がなく、書くことの方が自由に表現できる子については、本時で書いたことを次の時間に紹介できる時間をとるようにしたい。

5 単元構想

次ページ参照

6 本時について

中(1) 本時目標 きつねとくまの言動から気持ちの変化を読み取ることができる。

学 習 活 動	主な支援・留意点 ◆評価 [観点]
5 はなしあったあとにかんがえた。 二人がともだちだなというきもちにかわったところをかこう。 ◆「(4のばあん) 前とかわって、勇気を出して話したから、あやあ」って思わず言ってるから。 ◆「(5のばあん) 前と同じで、今日から一番の友達って書いてあるし、あったとき「やあやあやあ」って思わず言ってるから。」 ◆「やあやあやあ。」になった。 思わず言っている。 ◆「なにかよいいちばんの友達になりました。」 ◆「荷物を持ってあげたくなった。」 ◆「荷物をもちましよう。」 ◆「どうも、ありがとう。」 ◆「や、」っていった。ぼじめて」 ◆「荷物を出した。」 ◆「また、友達じゃないから。」 ◆「みあってる。」 ◆「あれ。」ってきづいている。 ◆「また、友達じゃないから。」 1 本時のめあてを確認する。 二人がともだちだなというきもちにかわったところは、どこだろう。	□全文を読み、内容を確認する。 □本文に戻って理由づけしているところは、全員で確認する。 □気持ちの変化が比較して考えやすいように、板書する。 □ことばと気持ちの変化の関係に気づくことができるよう、今までの学習を振り返りながら話し合えるようにする。 ◆読み取ったことをもとに考えを発表したり、自分の考えと比べたりしながら、聞いている。[関心・意欲・態度] ◆きつねとくまの言動から気持ちの変化を読み取ることができる。[読む]

7 実践を終えて

本時について

問いを「気持ちが変わったところ」としたが、話し合うというより確認の傾向になってしまった。子どもたち一人ひとりの中では、そのことについてはすでに解決していたのだ。積極的ではないが、思いを持っている子にとって成長のきっかけになることに期待を持った「問い」でもあった。しかし、その子にとっても思考の流れにそったものではなかった。なぜかといえば、これまでの学習で場面ごとにきつねとくまの気持ちの変化を考え、出し合ってきた。そのときに「少し気になり出してる。」「もう、友達と思っているから・・・。」という言葉がその都度出てきていたからだ。あえてまとめとして、本時の題材について話し合うには、関心が薄れていってしまっていた。そのことよりも、場面ごとに、せりふのやりとりや様子を、気持ちを込めて表現することのほうへ関心は強くなっていた。子どもとの思いのズレがあったこと、見取りに見失っていたものがあったことは、おおきな反省点だ。つまり、本時の課題は、子どもの解決したい切実な問題ではなかったのだ。

ひびき合う三の丸の子どもたちをめざして

(実践を終えて)

音読発表会の「音読で気持ちをこめて読むために」に向かって、登場人物の気持ちやその変化を想像し話し合ってきた。途中、この教材は場面ごとに様子を追うのか、読み方（音読）について追うのか、途中教師が迷ってしまった。子どもの思考は後者になりかけていた。ここで見取りを誤ってしまった。個々での方向は、本時の問いへとつながっていたのだ。それでも、子どもは場面ごとの二人の様子を自分なりに読み取り、ワークシートにまとめていた。ワークシートの内容から、その子の考える気持ちが変わったところは、見て取ることができた。

その後の音読発表会では「くまはきつねを意識しているから、目の動きをこうするんだよ。」「もう、友達になりたがっているから帽子をそっとどかすんだよ。」「もう友達だから、顔をみあわせていい。」という、深く気持ちをくみ取った発言が多く出された。子どもたちにとっての教材とのよりよい関わり方について、考えさせられるものとなった。考え込んでいたひとりの子どもが「〇〇さんの話を聞いて、4と5場面と決められないからその間にしたい。」という考えを出したとき「それでもいいね。」と声があがった。区切り（場面）を意識せず、全体をを見通しての決定のしかたは、新鮮で周りの子どもの考え方に刺激をあたえていた。次の学びへつながる一つとなった。

温かい気持ちの集団、そこから素直に感じたり受け止めたり表現したりする子を目指してきた。良い教材との出会い方があったとしても、教師の思い込みによる見取り違いは、子どもたちの学び・成長のさまたげになってしまう。そこには、教師の思いと子どもの思考のズレがあったときに、子どもを信じて、単元構想を何度も修正し、子どもの思考の流れに寄り添い、柔軟性を持った教師がそこにいるのか。改めて考えさせられ、今後も課題として取り組んでいきたい。

単元目標

登場人物の言動から様子を想像しながら読み、音読することができる。

事前の学習 「おおきなぐ」・登場人物の様子を想像しながらせりふを考え、音読発表会を楽しんだ。

★発表会、楽しかった。せりふを考えたり劇みたいにしりしたのが面白かった。

きつねとくまの言動に関心
をもって読もうとしている
(関心)

はじめは「や!」って、どんなお話だろう①

お話の聞き書きを並べる

・手紙をもっているから1番だよ。・仲よさそうだから、最後かな。

・「や!」って、はじめて話した言葉だよ。・友だちになったときの、あいさつじゃない。

全文通読・初発の感想を書く

「」もあるけど()もあった

「おおきなぐ」みた
いに音読発表会をい!なんで何回もあつ
たのに、あいさつを
しなかったのかな。感想から、課題となっていくこ
とがらを整理しておく。友だちになれてよかったけど
いっそう思ったんだろう。スタスタとかソソって何
の音? ボトリもある。「・・・」ってせりふない
よ。めあてははっきり、気持ちを
こめて。

「」と()って何だろう②

・「」はせりふだけ()は、思ってるだけじゃない。

・「」は声に出すよ。

だれの「」()が考える

「・・・」ってどう読むの?
スタスタとかソソって何のおとだろう③

・てんでんって読む。・心の中で読む。・心の中でかぞえるといい。

・歩く音。・急いでるって感じ。・ソソってゆっくりになると思う。

挿絵と「」()を対応させ
て想像しやすくする。

「・・・」の気持ちって?④⑤⑥⑦

くまときつねの動作に着目するようにし、気
持ちの変化を感じとれるようにする。

場面	「・・・」の気持ち	二人の様子	着目させたいところ
1 時	・知らないな。 ・あっ、くまさんだ。	・スタタって急いでる。 ・ともだちじゃないから、気にしてない。 ・見てるからきつていけるかもよ。 「みてる」ってかいてあるし。	・くまさん(きつねさん)を見ました。 ・ともだちじゃないから。 ・黙って。
2 時	・また、あったな。 どこに、いくのかな。	・くまさんが町へ散歩に行きた。 ・また、ともだちじゃないから、って言って、通り 過ぎた。	・ともだちじゃないから。 ・黙って。・思いました。 ・あっさきのきつねさんだ(くまさん)だ。
3 時	・どこ、いこうかな。 ・早く帰ろうと。	・信号であった。 ・人がいっぱいいて気づかなかった。 ・ともだちだったら、気づいてたと思う。	・ともだちじゃないから、気づきません。 ・黙って。
4 時	・また、あったな。不思議だな。 ・すわらせてくれて、やさしいんだな。 ・話してみようかな。	・くまさんは本屋に行った。 ・きつねは荷物をいっぱい持ってる。 ・すましているね。 ・くまさんはやさしい。荷物をもってあげたくな ったから。	・ぼうしをそっと隣におきました。 ・荷物をもってあげたくなりました。 ・すこし、すまして。 ・ともだちじゃないから。
5 時	・やった、会えたぞ。	・思わず、やあやあっていった。 ・とっても楽しくなった。 ・友だちになったよ。	・思わず。

二人がともだちだという気持ちに変わったところはどこか、書く。

二人がともだちだという気持ちに変わったところはどこだろう。⑧ 本時

きつねとくまの言動から変化
を読みとることができる。
(読む)・ともだちじゃないから黙ってたけど、「や!」って言ったときに、ともだちだと思ったと思う。
・荷物を持ってあげたくなったところじゃない。
・次の日だと思う。だって、その日から一番のともだちになったってかいてあるもん。挿絵を有効に使って板書し、考
えるときよりどこになるように
する。

学習感想を書く

・最後はともだちになったと思ったけど、その前からかもしれないと思った。
・荷物を持ってあげたところから、ともだちと思ったと思う。

音読発表会をしよう!⑨⑩

めあてははっきり、気持ちを
こめて。きつねとくまの様子を
想像して、伝わるように
工夫して音読している。
(読む)・お話長いよ、どうする。考えたせりふをつけよう。「・・・」は、どう読む? ()は小さい声で読むか
・振り付けしたいな。

音読練習をする。

発表会(話し 工夫したところを伝える) 相手 よかったところを伝える。

・はっきりとした声で読もうにしました。

・ナレーターとか二人ずつ分かれて読みました。

・「・・・」の読み方を工夫していた。

・気持ちをこめて読んでいた。

・声の大きさを覚えて上手だった。